

―先生のご指導を30ヶ所変更の「新版 法華経方便品・自我偈講義」他、を読んで―

創価高校・大学4期 岡斉修

新春、お喜び申し上げます。1月2日、池田先生のご生誕日、先生への報恩感謝と共に、衷心より追善回向申し上げます。

先生が一昨年の11月15日にご逝去されてから本日まで、私は毎日、先生の著作を拝して参りました。また、先生のご逝去直後に発刊の「教学要綱」を読み、その論述が先生のご教示、特に「法華経の智慧」に反した釈迦本仏論が潜伏していると思い、どうして今、このような変更が必要なのか、どなたかに御教示頂けないかとの思いになりました。

そこで私は、もう一度、教学を研鑽しようと決意、2000年発刊の「仏教哲学大辞典第三版」と2015年発刊の「教学入門」も併せて精読しました。その結論として「教学要綱」には、上記の三著作には明示された日蓮仏法の主要5つの根本義を明示せず、さらに、2017年発刊の「教学用語集」には、久遠元初を無視した「教学要綱」の方向性が既に表れているという実態を知りました。

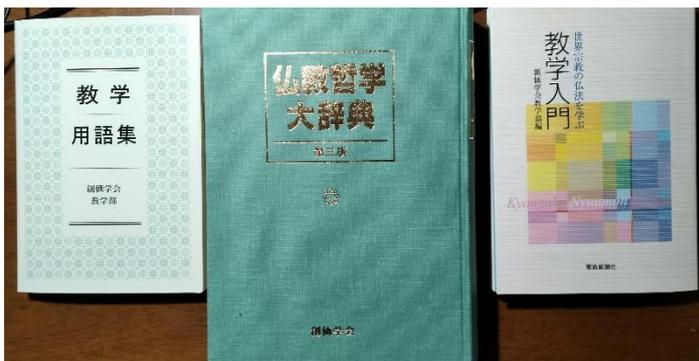
私見、「教学要綱」についての主要5つ、重大なる疑問(一大秘法につきましては、「仏教哲学大辞典第三版」にのみ正論、解説あり)は以下です。

1. 釈尊の「成仏した本因」を明かさないこと。
2. 「日蓮=久遠元初自受用報身如来=南無妙法蓮華経=人法一箇の御本尊」を記さず、単に釈尊から託された「南無妙法蓮華経」を弘める菩薩(91頁)とすること。
3. 「人本尊」と「法本尊」、御本尊の相貌の根本義「人法一箇」を一切記さないこと。
4. 大聖人の竜の口法難での「発迹顕本」の真義を論述しないこと。
5. 三宝の法宝は「御本尊」を削除して「南無妙法蓮華経」に変更、僧宝は日興上人を削除して「創価学会」に変更。一大秘法も「本門の本尊」を突如、「南無妙法蓮華経」に変更した誤り。また、それ等全てに理由がないこと。



その後、私は、先生の一周忌に追善回向申し上げ、さらなる教学研鑽を決意、先生のご指導の中心と拝する1995年、1996年(寿量品1の発刊日は1月2日)発刊の「池田名誉会長の 法華経方便品・寿量品講義」全3冊(以後「講義」と略)を拝読しました。

そして、その比較として2022年発刊「新版 法華経方便品・自我偈講義」(以後「新版」と略)も合わせて、拝読しました。その結果、私見、「講義」に明記された日蓮本仏論についての論考を、「新版」は30ヶ所にわたり削除、変更された実態がありました。



また、私は、2000年発刊の「仏教哲学大辞典第三版」(以後「辞典」と略)と、2017年発刊の「教学用語集」(以後「用語集」と略)についても、精読し、比較しました。その結果は同じでした。

私は、池田門下生として先生の論述の削除、変更は許せません。現在まで、先生のご指導は、ほとんどが池田大作全集の全150巻(「講義」は第35巻)に掲載されており、世界中の学会員さんが拝しています。その先生のご指導に、どうしてこのような変更が必要なのか？どなたか、御教示頂けませんでしょうか。

本日、1月2日の重要な意義を胸奥に刻み、池田門下生の責務として、微力ながら、後続の皆様に先生の正義を明確に致します。まずは、「講義」と「新版」との比較を、次に、「辞典」と「用語集」との相違を記し、最後に「教学入門」に記された日蓮仏法の真義を記し置きます。

「講義」は29年間、全世界で拝読され、先生がご教示された法華経と日蓮仏法への根本的なご指導でございます。その一言言たりとも軽率に削除、変更があってはなりません。しかし、現実には反対です。その事実を下記に記します。

先生の『法華経 方便品・寿量品講義』1方便品と、「新版」との比較

1. 「講義」17頁には一方便品の 講義に当たっての小題「万人に開かれた文底仏法」のところに一日蓮大聖人が法華経を読まれるのは、釈尊が説いた法華経をそのまま読むのではなくて、末法の御本仏という御境界で『予が読むところの迹門』『予が内証の寿量品』とおおせられ、**文底からの読み方**なのであります(『戸田城聖全集』5)一と。

「新版」21頁では一戸田先生の引用を含め、最も重要なご指導が完全に削除

2. 「講義」18頁には一小題「文底とは大智慧の活積・民衆訳」のところに一私どもが勤行の際に方便品・寿量品(自我偶)を読むのは、**正像時代の法華経ではなく、大聖人の南無妙法蓮華経の立場から**読んでいるわけです。

「新版」22頁では、小題も含めて完全削除。

3. 「講義」20頁には一小題「読誦する功德」のところに一この「正行」と「助行」の関係について、日寛上人は、米やソバを食べる(正行)時に、塩や酢が調味料として使われて味を助ける(助行)ことに譬えておられる(六卷抄一九三ページ)。「正行」の功德は広大です。そのうえで、「助行」は「正行」の功力を増し、促進する助縁の働きをもっている。

「新版」23頁では上記が完全に削除。

4. 「講義」22頁～23頁には一小題「方便品・寿量品は二十八品の根幹」のところに一ただし、当然のことながら、私たちが読誦している方便品・寿量品は、先にも述べたように、大聖人の**文底**の立場から見た法華経です。日寛上人は次のように説明しています。すなわち方便品を読むのは「所破・借文」のため、寿量品を読むのは「所破・所用」のためである、とされています(六卷抄一九四ページ、二〇一ページ)。

簡潔に言うと、大聖人の仏法の立場から、**「釈尊の法華経は末法には功力がない」と破折する読み方が「所破」**です。そして、「法華経が御本尊の偉大さを証明している」として讃嘆する読み方が「借文」と「所用」にあたります。なぜ、こう説明されるかについては厳密な論議がありますが、ここでは、私たちの方便品・寿量品読誦は、あくまで大聖人の立場から法華経を読誦していることを確認しておくにとどめたい。

「新刊」25頁では、上記が完全に削除。

5.「講義」74頁には一小題「御本仏に連なる誉れ」とあります。

「新版」68頁では、この小題が「末法の御本仏に連なる誉れ」に変更。

6.「講義」77頁には一日顕宗の権威主義は、法華経の心が何もわかっていない証拠なのです。(中略)日蓮大聖人は、様々な御書で、三大秘法の御本尊を「未曾有の大曼荼羅」と仰せです。

「新版」71頁では一上記の、日顕宗の権威主義は、法華経の心が何もわかっていない証拠なのです、が削除、また、三大秘法の御本尊が、南無妙法蓮華経の御本尊へと変更。

7.「講義」84頁には一大聖人の滅後にあっても、日興上人がただ御一人立ち上がられたゆえに、大聖人の正義が護られたのです。日興上人が沈黙されたならば、「五老僧が正義」との歴史ができてしまったでしょう。ゆえに、日興上人は厳格なまでに、五老僧の邪義を打ち破られたのです。

五老僧は、大聖人の「意趣」、つまり御本仏の御真意が分からなかった。大聖人の「意趣」とは、三大秘法の御本尊を広く宣流し、末法の全民衆を幸福にするということに尽きる。五老僧は、この三大秘法を顕された大聖人の御心を見失ってしまった。

日興上人ただ御一人が、大聖人に常随給仕され、ともに難を忍ばれ、師の仰せのままに果敢に弘教を展開された。師と共に心を合わせて戦ったがゆえに、大聖人の「意趣」が分かったのです。「師の心」が正しく伝わったかどうかは、「弟子の行動」を見れば、分かるものです。いくら三大秘法を持っていると自称しても、万人の幸福を願う広宣流布への行動がなければ、大聖人の「意趣」を見失った姿であると断ずる以外にない。

「新刊」77頁では、上記が完全削除。

8.「講義」128には一戸田先生は文底の立場から、この方便品の文が「御本尊の境涯」を説いていることを教えられました。一南無妙法蓮華経の境涯は、法華経述門の仏とは天地雲泥ほどの恐ろしい違いがある。我々は、なんの苦勞もなく「無上の宝聚を求めずして自ずから得た」のだ。

「新版」111頁では、上記一文底の立場から、この方便品の文が「御本尊の境涯」を説いていることを教えられました。一が削除、一戸田先生は、こう教えられました。一だけ。

先生の『法華経 方便品・寿量品講義』 2 寿量品と、「新版」との比較

9. 「講義」13頁には一ゆえに大聖人は「妙法蓮華経こそ本仏」(1358頁)であると述べられています。そして、この文底の立場から「如来寿量品」の「如来」とは「南無妙法蓮華経如来」、すなわち大聖人御自身であると宣言されているのです。

「新版」176頁では一「如来寿量品」の「如来」とは「南無妙法蓮華経如来」、すなわち南無妙法蓮華経と一体の仏の生命のことであると宣言一に変更。

10. 「講義」16頁には一小題「だれが末法に弘めるか」のところに一日蓮大聖人は地涌の菩薩の上首・上行菩薩の再誕として末法の民衆を救うために寿量品の文底に秘沈された南無妙法蓮華経を御自身の魂とし、その御生命を御本尊として顕されたのです。

「新版」179頁では、一日蓮大聖人は、自らが地涌の菩薩の上首・上行菩薩に当たるとの御自覚から一に。寿量品に入った途端、「新版」は日蓮大聖人に対し、「上行菩薩に当たるとの御自覚」とし、以後、この解釈の繰り返しです。

11. 「新版」の184頁では一今や、地球上を題目が包む時代になりました。一と追記。

「講義」23頁にはこの文言はありません。

12. 「講義」25. 26頁には一小題「寿量品の題号の意義」のところに一日蓮大聖人は、この南無妙法蓮華経を御自身の御生命に所持されていた。そして、ひとまず上行菩薩の再誕としてのお姿をあらわし、この妙法を末法の衆生のために弘められたのです。このゆえに、大聖人は寿量品の題号を「身に当る大事」とされたのです。」

「新版」186頁では一日蓮大聖人は、この南無妙法蓮華経と一体となられた。そして、上行菩薩としての自覚を示され一に変更。

13. 「講義」28頁には一小題「南無妙法蓮華経の功德を量る」のところに一戸田先生も「ここに南無という二字をおつけになっただけで、如来という二文字の読み方が、ぜんぜん変わってくる」(『戸田城聖全集』5)と強調されていた。寿量品の題号を「南無妙法蓮華経如来寿量品」と読むとき、「文底の仏である「南無妙法蓮華経如来」の功德を量る」という意味になるのです。

「新版」187頁では一まず、題号の横に「日蓮大聖人」と書かれているのを削除、そして「文底の仏である」を削除。

「講義」の続き—大聖人が「此の品の題目は日蓮が身に当る大事なり」と仰せになっているのも、御自身が**文底の南無妙法蓮華經如来**」であられるからです。

「新版」187頁では—御自身が(文底の-を削除して)南無妙法蓮華經と一体だからです—に変更。

「講義」の続き—また、この**文底の仏**を「無作の三身」とも言います。

「新版」187頁では—また、ありのままの仏である「末法の仏」を「無作の三身」とも言いません。—に変更。

14. 「講義」31頁には—小題「本門と迹門」のところに—迹門と本門の関係は、例えていえば、迹門は「天の月が水に映った影(水月)」であり、本門は「本体である天月」にあたる。なお、**文底の立場からいえば、日蓮大聖人が御本仏であり、久遠実成の釈尊も迹仏となる。**

「新版」190頁では、この赤字の根本義「なお、文底の立場からいえば、日蓮大聖人が御本仏であり、久遠実成の釈尊も迹仏となる。」を完全削除。

15. 「講義」41頁には—「三請不止」の部分を**文底から**読むならば、御本仏・日蓮大聖人が、南無妙法蓮華經という、「仏の真実の語」を信解し、実践するよう、弟子たちに誠められた経文といえます。

「新版」195頁では—「三請不止」の部分を私たちの立場から読むならば—に変更。

16. 「講義」46頁には—小題「久遠とは「はたらかさず・つくろわず」のところに—「久遠」について、大聖人は仰せです。「此の品の所詮は久遠実成なり久遠とははたらかさず・つくろわず・もとの儘と云う義なり」と。これは久遠の文底の意義です。これを文上の久遠と分けて「久遠元初」ともいいます。この久遠の意味は、御文に仰せのように、“もとのまま”ということです。

「新刊」200頁では—上記の**赤字**を削除して、「久遠」について、大聖人は仰せです。「此の品の所詮は久遠実成なり久遠とははたらかさず・つくろわず・もとの儘と云う義なり」と。この久遠の意味は御文に仰せのように“もとのまま”ということです。— へ、削除、変更。

17.「講義」51頁には一日蓮大聖人は、御自身の南無妙法蓮華經如来の生命を御本尊として顕されました。まさに、「如来秘密神通之力」とは、御本尊のことです。

「新版」204頁では一末法の御本仏・日蓮大聖人は、(御自身の削除)南無妙法蓮華經(如来削除)と一体となったご自身の生命を御本尊として顕わされました。一に変更。

18.「講義」61頁には一小題「久遠元初とは”生命根源の時”」のところで一大聖人は、御自身の生命に具わっているこの成仏の根本法が南無妙法蓮華經であり、御自身が南無妙法蓮華經如来であると明確にお説きになり、その大生命を御本尊として顕されて、末法の一切の人々に与えてくださったのです。

「新版」211～212頁では一大聖人は、御自身の生命に具わっているこの成仏の根本法が南無妙法蓮華經であり、さらに御自身が南無妙法蓮華經と一体であると明確にお説きになり、その大生命を御本尊として顕されて、末法の一切の人々に与えてくださったのです。一と、「如来」を削除して変更。

さらに、「講義」同頁には一「久遠」とは十界具足の常住の生命のことであり、十界常住の南無妙法蓮華經の御本尊です。「実成」とは、私たち一人一人の内に具わっている御本尊が現れ、その功德が開かれてくるということです。これが文底の久遠実成です。これを文上の久遠実成と明確に区別してそして、「久遠元初」とも言うのです。

「新版」同頁では一「久遠」とは十界具足の常住の生命のことであり、それは「永遠の法」である南無妙法蓮華經と一体です。「実成」とは、私たち一人一人の内に具わる南無妙法蓮華經の働き、功德が、わが身に開かれ現れてくるということです。これが文底の久遠実成です。これを文上の久遠実成と明確に区別して「久遠元初」と表現することができます。一に変更。

19.「講義」の65～66頁には一「開目抄」に「日蓮といふし者は去年九月十二日子丑の時に頸はねられぬ、此れは魂魄・佐土の国にいたりて」——日蓮と言っていた者は去年(文永八年)九月十二日子丑の時(夜半すぎ)に凡身の頸を刎ねられた。これは、魂魄が佐渡の国に至ったのである一と。この一節について、日寛上人は次のように述べられている。一「この文の元意は、蓮祖大聖は名字凡夫の御身の当体、全くこれ久遠元初の自受用身と成り給い、内証真身の成道を唱え、末法下種の本仏と顕れたまう明文なり」(「開目抄文段」文段集一九二ページ)と。すなわち、凡夫の身のうえに久遠元初の自受用身の生命を顕された——これが、大聖人の「発迹顕本」です。大聖人の御内証の本地—それは、久遠元初の自受用身であられる。自受用身とは「ほしいままにうけもちいるみ」(御書759頁)です。 7/16

「新版」216頁では—上記の赤字下線が完全に削除、その後—すなわち、凡夫の身のうゑに久遠元初の根源の仏の生命を顕わされた——これが、大聖人の「発迹顕本」です。大聖人は、根源の妙法の力用を自由自在に受け用いる宇宙大の境涯を示されたのです。—に変更。

20. 「講義」86頁には—小題「五百塵点劫は始成の成仏觀を打破」のところで—大聖人は「觀心本尊抄」で、妙法を受持するわれらの「己心の釈尊」は、「無始の古仏」であると仰せです(御書二四七ページ)。この文底の趣旨を明らかにしたのが「久遠元初」です。「久遠元初」とは、生命の本源、大宇宙の本源という意味です。その本源の生命こそ久遠元初自受用身如来の生命であり、即南無妙法蓮華經です。「久遠とは南無妙法蓮華經なり」(御書759頁)と仰せです。

「新版」231頁では—上述の赤字下線が完全削除。

21. 「講義」93頁には—小題「この世界こそ、わが使命の仏国土」のところで—文底から言えば、この”舞台”で活躍するのは、久遠実成の釈尊だけではありません。すでに述べたように、久遠実成を“元初の生命に立ち返ること”と、とらえるのが、文底の意です。

「新版」237頁では、小題の後にあるべき上記が完全削除。

22. 「講義」109～110頁にある小題「仏法は最高の「健康」「長寿」の法」が「新版」248頁で、小題ごと、全文削除。(内容は池田先生の文底の立場からの読み方です。詳細は省略します。)

23. 「講義」136頁には—文底から言えば、「如実知見」している「如来」とは日蓮大聖人です。大聖人こそ、久遠元初から常住する慈悲と智慧の生命—寿量品の文底に秘沈されている南無妙法蓮華經の大生命の当体なのです。そして、私たちが拝する御本尊は、大聖人の慈悲と智慧の御生命そのものです。

「新版」268頁では寿量品の根本義である上記が完全削除。

24. 「講義」143頁にある—小題の「一身即三身・三身即一身」の仏とは日蓮大聖人—のところで、—文底から言えば「一身即三身・三身即一身」の仏とは、南無妙法蓮華經如来すなわち日蓮大聖人です。

「新版」274頁では、ここでも、小題も含め上記、そして、全文が削除。

先生の『法華経 方便品・寿量品講義』 完 3寿量品一2と、「新版」との比較

* 以下、25～30の全てを太字にしました。寿量品の根本義の完全否定だからです！

25. 「講義」20頁から22頁の、小題である「**末法の本尊は「本因妙の釈尊」=大聖人**—と、その全文の25にわたる記述があります。(以下に掲載)

「新版」297頁では— 小題が消去され、その後一本因妙の心は、“人間の尊厳を開く実践” にあります。このことを端的に示しているのが寿量品の「我本行菩薩道」の文です。—これだけ。池田先生の「講義」に記載の、以下全文を完全削除。

— 「我」とは、先に述べたように、久遠において菩薩道を実践した「**凡夫の釈尊**」です。われわれと同じ人間です。決して人間を超えた何者かではない。久遠とは生命の本源であり、生命の本源に立ち返った久遠の凡夫が「**本因妙の釈尊**」です。

この「**本因妙の釈尊**」を本尊とするのが、**大聖人の仏法**なのです。久遠における「**本因妙の釈尊**」は、**すなわち末法の御本仏日蓮大聖人**であられる。久遠即末法です。このことは大聖人の次の仰せから明らかです。

「今日蓮が修行は久遠名字の振舞に芥爾計も違わざるなり」「久遠の釈尊の修行と今日蓮の修行とは芥子計も違わざる勝劣なり」(御書864頁)すなわち” 今、末法における日蓮大聖人の修行は、久遠における名字凡夫の釈尊の修行と少しも変わることがない” と仰せです。

名字とは名字即のことで、妙法を信受する凡夫の位をいう。日寛上人も本因妙の釈尊即大聖人、久遠即末法と拝する理由について、行位全同——「行」と「位」がまったく同じだからである、と言われている。(六巻抄八八ページ)「行」は修行であり、妙法受持の実践です。また「位」とは名字凡夫の位です。つまり行位全同とは、人間として妙法を受持しぬく実践が、久遠と末法ではまったく同じであるということです。

妙法を受持する「人間としての実践」が妙であり、不可思議であるといえる。そこに、成仏の本因・本果、すなわち幸福の根本原理が具わるからです。それが本因妙です。それゆえ、末法においては、**本因妙の釈尊即日蓮大聖人を本尊と拝すべき**なのです。—と記述です。以上、長文のご指導、如来寿量品第十六の最重要講義が完全削除！

26.「講義」45頁～46頁には一小題「末法では唱題こそ最高の善根」のところに 一文底から読めば、この仏とは、**南無妙法蓮華經如来すなわち日蓮大聖人**であられることは言うまでもありません。また、「薄徳の人」とは末法の衆生のことです。

大聖人は、末法のすべての衆生が「福德の人」となることを願い、方便として入滅されました。「如来難可得見」(仏にお会いすることは難しい)という道理を、御入滅によって末法の民衆に教えられたのです。そして、大聖人に、お会いすることのできないすべての民衆のために、**御自身の真実の境地である南無妙法蓮華經の大生命を御本尊として顕し、遺してくださったのです。**何と広大な、御本仏の大慈大悲でしょうか。

したがって、「心に恋慕を懐き、仏を渴仰して、便ち善根を種ゆべし」とは、われわれ末法の衆生の姿と読むべきです。「恋慕」「渴仰」の心とは、御本尊への強き「信心」である。また「善根」とは、「御義口伝」に「**善根は題目なり**」とあるとおり、妙法を唱えることにほかなりません。

「新版」318頁では、上記の小題も含め、これまた寿量品の最重要講義が全文削除。1

27.「講義」92頁には一大聖人御自身、**一往・文上の御立場では**、この地涌の菩薩のリーダーである上行菩薩の**再誕**として、妙法弘通に挑まれました。**しかし再往・文底では**、大聖人こそ末法万年の民衆を救う南無妙法蓮華經の「大良薬」を残された御本仏であられることは言うまでもありません。

「新版」358頁では「一往・文上の御立場では」と「再誕」を削除し、大聖人御自身、この地涌の菩薩のリーダーである上行菩薩との御自覚で妙法弘通に挑まれました。(中略)さらに「しかし、再応・文底では」を削除し、大聖人こそ、末法万年の民衆を救う南無妙法蓮華經の「大良薬」を残された御本仏と拝しています、一に変更です。

28.「講義」155頁には一小題「苦海の社会を常楽の太陽が照らす」のところで**一文底から言えば**、つねに住する不滅の仏とは、**御本尊、南無妙法蓮華經如来**です。その常住の仏が出現して説く無上の法とは、南無妙法蓮華經にほかなりません。私たちが不惜の信心で唱える題目の声は、そのまま常住の仏が無上の法を説く声となるのです。それは、功德の実証などを通じて、妙法の力を私たちに教えてくれます。

「新版」410頁では、上記、寿量品の最重要講義が完全削除。

29.「講義」180頁には一私どもは、厳然と末法における真実の三宝を知っている。すなわち、仏宝は末法の御本仏・日蓮大聖人、(中略)僧宝は日興上人にほかなりません。また、僧とは”集い”を意味するサンガ(僧伽)のことですから、広げていえば、大聖人の仏法を正しく持ち弘めて、民衆救済、平和実現に励む和合僧団を指す。現代でいえば創価学会が、その和合僧団であることは、いうまでもありません。

「新版」431頁では—「三宝」とは、仏と、仏の教え(法)と、その教えを守り弘める人々の集い(僧)のことです。三宝は、いわば民衆救済の要です。それゆえに、仏法では人々を救う宝として尊重する。私どもは、厳然と末法における真実の三宝を知っています。と記した後に、「講義」の一仏宝は末法の御本仏・日蓮大聖人、僧宝は日興上人にほかなりません。—を削除して、

また、僧とは”集い”を意味するサンガ(僧伽)のことですから、今日で言えば、大聖人の仏法を正しく持ち弘めて、民衆救済、平和実現に励む和合僧団、即ち創価学会が僧法であることは、言うまでもありません—とだけです。「広げていえば創価学会」を削除して、創価学会だけに変更。

30.「講義」211頁には一戸田先生も語られていた。「每自作是念の毎という字はですね、三世一過去、現在、未来ということなんです。每自作是念とは、大聖人様が久遠元初の昔より常に我等衆生を救わんと念じられたことであり、重大な御文である。」と。—に対して、「新版」460頁では、上記を完全削除。

私見、「講義」の最終章にある、この戸田先生の“重大な御文”の引用文が「新版」で削除されることは、「新版」の自語相違です。「新版」1頁の「発刊に当たって」では、—

本講義では、第二代会長・戸田城聖先生の講義も十二分に踏まえながら、二十一世紀の現代世界に向かって、仏法の間人主義を展開する内容になっており、「師弟合作」の法華経講義であると言える。(1頁13行目～2頁2行目)—と、明言ですが

本文で、戸田先生が「重大な御文」とまで言われた言質を明記しないとは、「新版」は一体何をもって、「十二分に踏まえているのか」と思わざるを得ません。「師弟合作」ではない！「師弟否定」とまで思えてしまいます。

結論、「新版」は池田先生が「講義」でご教示の「久遠元初の自受用報身如来」を完全削除、三宝の内、「僧宝は日興上人」を削除、「創価学会」だけにしているのです！つまり、表面だけは、「文上」と「文底」なのです。日蓮仏法は「久遠元初自受用報身如来」こそが、文底なのです！ゆえに、「新版」は「文底もどきの作文」であり、先生のご指導とは言えないと思います。 11/16

続いて、2000年発刊「仏教哲学大辞典第三版」と2017年発刊「教学用語集」を比較検証しました。その結論、「教学要綱」に記されない日蓮仏法の下記5つの根本義は「辞典」に全て正論(頁を付記、記述は長文のため不掲載)が明確に記されています。

1. 釈尊の”**成仏した本因**” は日蓮大聖人の生命そのもの＝南無妙法蓮華経(1248頁)
2. 日蓮大聖人は「**久遠元初の自受用報身如来**」(343頁)
3. 御本尊は「**人法一箇**」の当体(1320頁)
4. 日蓮大聖人の竜の口法難での「**発迹顕本**」の真義(1527頁)
5. 三宝の法宝は「**南無妙法蓮華経の御本尊**」、僧宝は「**日興上人、広げれば創価学会も僧宝**」、そして、一大秘法は「**本門の本尊**」(三宝は611頁、一大秘法は78頁)

しかし、「用語集」の記述では、上記の内、1, 2, 3については、「教学要綱」と同様に、全く記述がない。また、4の日蓮大聖人の「発迹顕本」の解説では、一応は日蓮大聖人をカッコ書きで(久遠元初の自受用報身如来)と記しているが、「久遠元初の自受用報身如来」の用語解説それ自体(70頁)が、日蓮大聖人であると明記をせず、これでは、全く、整合性に欠けます。

5については、僧法の解説が一僧法は日興上人であり、現代の僧法は創価学会となる。—との変更です。さらに、一大秘法については「用語集」には解説はないですが、「教学要綱」は突如、理由も記さずに、一大秘法は「南無妙法蓮華経」と明記！こんな急変では、学会員は混乱します！

「教学要綱」の6年前、2017年発刊の「用語集」に解説の「**久遠元初**」(70頁)では、日蓮大聖人を記さずに釈尊を論上に取り上げて、以下の論述です。

— ある特定の遠い過去ではなく、宇宙と生命の永遠の根源の次元。久遠元初とは寿量品に即して表現すれば久遠五百塵点劫の当初の意で、時間的な表現で釈尊の久遠の成仏の根底を指示している。しかし本質的には、無始無終の妙法を凡夫の信の一念に開覚し、凡夫のままで無作三身を成就する根源的な成仏の時は全て久遠元初である。— と。

私見、上記から言えることは、「用語集」は久遠元初について、一つの時点として時間論でとらえていることが基本的な誤りです。

そこで、私は、「用語集」70頁にある3つの記述について、次のように考えます。

「**久遠**」の項目に記された「また、釈尊の根源的な成仏の時を久遠元初とし」から、「久遠元初とすることから」までは削除すべきです。なぜなら、釈尊の成仏は久遠元初ではなく、久遠実成と教わってきました。

また「**久遠元初**」の項目でも「寿量品に即して表現すれば」から「根底を指し示している」までも不適切で削除すべきではないか。す。また、「**久遠元初の自受用報身如来**」の項目についても**日蓮大聖人、また妙法を受持した万人**がそれに当たるにすべきではないかと思えます。

上記の事実から強く推定されることは、2017年発刊の「用語集」は、久遠元初を完全に無視した「教学要綱」に比べればまだましとも言えますが、「教学要綱」の方向に傾斜している面が強く、不適切です。結果、私としては、「用語集」は、「教学要綱」と共に、絶版にすべきであり、「仏教哲学大辞典第三版」の実質的な復活を目指すべきと考えています。

「仏教哲学大辞典第三版」は2000年の発刊であり、池田先生がちょうど同時期に、**『法華経の智慧』全6巻**を完結されたのです。つまり、池田先生が監修された最高峰の仏教哲学であり、日蓮仏法の真義、正義が完璧に解説された大辞典なのです。それに対し、「用語集」は日蓮仏法の重要義を解説していません！これでは、「劍豪の修行」である日蓮仏法の研鑽は、不可能です！

続いて、2015年発刊「教学入門」(以下「入門」と略)には、2023年発刊「教学要綱」において削除、変更されてしまった上記5つ、日蓮仏法の本義についての正しい解説がありますので、それをご紹介します。

1、釈尊の”成仏した本因”については、「入門」175頁の、小題「本因妙の教主」のところに—

日蓮大聖人が自身の生命に覚知された法は、法華経で釈尊が久遠の昔に菩薩として実践し仏となった根本原因の素晴らしい法であることが示されているので**本因妙の法**です。日蓮大聖人は、この本因妙の法を凡夫の自身の生命に護持し、それを**南無妙法蓮華経であると顕わして**、人々にも教えられたので、本因妙の教主とも言われます。

(中略)

これに対して法華經本門の文上に説き示される釈尊は、久遠の昔に成仏した永遠の仏としての果報を身に表して、三十二相八十種好など、中には人間離れた特殊な種々の特徴を具えた荘嚴な姿を実現しています。このように超人的な果報を示しているのは、人々に憧憬を抱かせ、慕わせ、教え導くための方便です。この教えは、本果妙を表とした教えです。それゆえ、本門文上の釈尊は本果妙の教主と言われます。

2. 日蓮大聖人は「久遠元初の自受用報身如来」については、「入門」174頁の、小題「久遠元初の自受用身」のところに―

日蓮大聖人は、凡夫の身のままで、内面に仏の覺りの境地を確立されましたが、それは生命に本来的に具わる仏の境地、すなわち、本有の仏界を開き顕わしたものです。仏としての本性、すなわち仏性でもあります。本有の仏界を開き顕わした仏の境地は、そこに具わる智慧・慈悲などの功德を發揮し、自ら享受し、自在に用いていけるものです。この境地は、久遠元初の自受用身の境地です。

久遠元初とは、法華經寿量品では、五百塵点劫という久遠の昔に、釈尊が実は成仏していたこと(久遠実成)が明かされますが、その成仏を成し遂げるために菩薩道を行っていた(我本行菩薩道)凡夫の時を言います。これは法華經の文に引き寄せての理解であり、より本質的には、ある特定の遠い過去というのではなく、生命の本源の時をいいます。

すなわち、久遠元初とは、”久遠の過去から永遠の未来まで常に“ということであり、本来的に具わっていることを意味します。凡夫の生命に本来的に具わる仏の境地が、久遠元初の自受用身です。一とあり、また、次頁4「発迹顕本」の解説においても、久遠元初自受用身如来が説明されています。

3. 御本尊は「人法一箇」の当体については、「入門」208頁に―

自ら覺った妙法をそのまま説く自受用身の仏は、境地冥合の姿そのものと言えます。人と法が一体不二であるので、人法一箇・人法体一ともいいます。(中略)日蓮大聖人は、法華經の寿量品の文の底に秘められていた久遠の仏の真意である万人成仏の妙法を覺知して、それは南無妙法蓮華經であると説き広めて、久遠元初の自受用身の再誕として振る舞われました。その境地冥合の御自身の生命をそのまま曼荼羅に顕わされ、私たちが信受すべき御本尊とされたのです。

4. 日蓮大聖人の竜の口法難での「発迹顕本」の真義については、「入門」12頁の小題「竜の口の法難と発迹顕本」のところに―

この法難は、大聖人御自身にとって極めて重要な意義をもつ出来事でした。すなわち、大聖人は竜の口の法難を勝ち超えた時に、宿業や苦悩を抱えた凡夫という迹(仮の姿)を開いて、凡夫の身に、生命に具わる本源的な、慈悲と智慧にあふれる仏(久遠元初の自受用報身如来)という本来の境地(本地)を顕わされたのです。

これを「発迹顕本(迹を開いて本を顕わす)」といいます。この発迹顕本以後、大聖人は末法の御本仏としての御振る舞いを示されていきます。そして、万人が根本として、尊敬し、帰依していくべき御本尊を凶顕されていきました。

5. 「三宝」については、「入門」272頁の小題「三宝」のところに―

日蓮大聖人の下種仏法において尊崇する三宝とは、生命の根源の次元である久遠元初の三宝です。「久遠元初」とは”久遠の過去から永遠の未来まで常に”という意味です。実践に即していえば、凡夫が妙法を自身の生命に開き顕わす根源の成仏の時を意味します。「久遠元初の三宝」とは私たちの成仏のために永遠に尊崇する三宝です。

久遠元初の仏宝は凡夫の身に成仏の根源の法を開き顕された久遠元初の自受用報身如来であられる日蓮大聖人です。久遠元初の法宝とは、大聖人が万人成仏の法として説き示された南無妙法蓮華經の御本尊です。久遠元初の僧宝とは、この仏宝と法宝を護持し正しく伝えた日興上人です。以上が下種仏法で尊崇の対象となる三宝です。(中略)

尊崇の対象となる三宝を正しく護持して伝え広める人々の集いも、広い意味での僧宝です。今日では、日蓮大聖人の御心とお振る舞いを継承し、世界広宣流布を推進している創価学会が僧宝に当たります。

* 上記の正論が、8年後、2023年発刊の「教学要綱」では説明もなく削除、変更です。

池田先生が、私達に、真実の仏法である「久遠元初の日蓮仏法、南無妙法蓮華經」をご教示下さったのです！これこそ、学会永遠の原理です！それを削除、変更してしまえば、これまで池田先生のご指導を心肝に染めてきた多くの学会員さんは混乱してしまいます。また、新会員の方々も、必ずその矛盾に気づかれ、見抜かれると思います。



池田先生の詩

(詩集「四季の励ましⅣ」より)

一 満々たる生命力で出発！一

妙法に生きる私たちは、毎日が久遠元初であり、毎日が元旦である。
今日も、わが生命に 赫々(かっかく)たる元朝の太陽を昇らせ、
無明の闇を打ち破っていける。
その暁鐘こそ、南無妙法蓮華經という音律なのだ。

私は、上記、変更の論証から、2022年発刊の「新版 法華經 方便品・自我偈講義」と、2017年発刊の「教学用語集」の両書が、2023年発刊の「教学要綱」の主旨である一日蓮は単に釈尊から託された「南無妙法蓮華經」を弘める菩薩(91頁) 一と同様の文上解釈である「釈迦本仏論」の方向性を持った書であると思っています。

そして、その方向性とは、三代会長が法華經を文底から拝され、私どもに垂教された一日蓮＝久遠元初自受用報身如来＝南無妙法蓮華經＝人法一箇の御本尊一即ち「日蓮本仏論」を否定しているのだと思います。そしてさらに、それらを池田大作全集に記載済みの「講義」を変更して発刊したことは、創価学会の会憲第三条の精神である「三代会長はこの会の広宣流布の永遠の師匠である」にも相違するとも思います。

「時の貫首たりといえども、仏法に相違して己義を構えば、これを用いるべからざること」と遺誡された日興上人の精神に照らせば、教義変更の理由に心から納得できなければ、本当に正しい信仰なのかどうか確信を持たなくなりますので、どなたかからでも、是非とも明確なご説明を頂けないでしょうか。

本日、池田先生のご生誕日に現状を記し置きました。先生の「講義」を削除、変更した「新版」について、皆様からのご高見、ご感想を拝したく思います。下記 zusaiosamujyumoku@yahoo.co.jp にお問い合わせ申し上げます。また、親しき同志、友人にも、この拙文をご紹介して頂き、この現状を伝えて下さいませ。 敬具 凶斉 修